革命の軍隊

創刊号

共産主義者同盟
神奈川県委員会

目次

(一) 大衆的中央権力闘争から内戦へ　杉野　喬
(二) 一・二一闘争の総括と二・一月闘争　山上　武

世界同時革命の旗の下、世界革命戦争を
切り開く内戦の開始を十一月闘争で！

10・21斗争の総括と11月斗争

10・21斗争で示されたもの——権力の現段階とは？

文責　山上　武

10・21斗争は、一言で要約すれば、全ての新左翼が政治的に敗北した斗争であった。

この敗北の総括を「もし技術的にうまくいっていたら、武器を上手に結合させたならミミしてもと、彼の体制が整理されていたならミミ」「敗北したのかも知れぬ」という形でしか考えられないような部分は相当的ですらある。

この「もしミミなら、勝利したし」という仮定が存在しえないところに、今日の階級斗争の到達し、我々に課した任務の厳しさがある。

10・21斗争の敗北は、現象的には、(イ)権力の内ベリが強く、装備が強く、且、又、市民の権力の側よりの組織化が自警団といったような形で進んでいた。(ロ)武器との結合が権力によってほぼ完全に打ち砕かれ、武器の負の機能が果されなかった。(ハ)そして、その結果として10・21を好保守戦の第一段階として規定しながら、実質的にカニパニア斗争に次ぐ加えられただけという形で表われた。

この権力の強さの前に、「我々は進みすぎた」大衆の所まで帰り、再び大衆をひきつけ進撃し直そう」とする及び者、更に前に進め！前面にでた権力をセンメツさせようとする及び者択一的選択を我々は迫られているのであり、事実そのように判断する形で我々は分極化している。

だが、我々はこうした選択をする前に次のことを確認しなければならない。

(イ)こうした権力の強化は、何よりも一〇・八斗争以来の高揚とその突出力が追いつめ、引出したものであり、権力の力量の強さは、我々の斗いが育て上げたものである。

(ロ)しかし、この権力は、現在の段階では、一〇・二一、一日限りという限定された時間の間は、完全に首都をファシヨ的治安体制を布き、制圧しきる段階に至っているが、決してそれ以上ではないということ。だからこそ、権力は、我々の斗いを一〇・二一だけに押し込めるように事前弾圧を展開し、一〇・二一斗争を発火しない斗いに追い入れたのだ。

いいかえれば、まさしく我々が、権力の手によって押し込められた事態の中に、主体と階級構造の全て

の問題があるのであり、それとの関係の中で路線の総点検がなされない限り、我々は一〇、二一の敗北を勝利の第一歩にすることは出来ない。

中央権力闘争の終結 ―権力と我々の課題―

さて一体、我々が権力の今日を引出し、育て上げたということはどういうことであるのか。

我々は、従来、我々の闘争の主要な形態を「中央権力闘争」としてきた。この中央権力闘争は一〇、八以前の平和的天皇闘争の段階から一〇、八闘争によって切り開かれた暴力的権力闘争、即ち蜂起、権力奪取へ或はそのための階級戦争へと立ち至らざるを得ない及、平和的闘争とは対照した、いわば過渡的な段階に於る闘争形態であった。

一〇、八以来、今春四、二八に至るまで権力の動向は、それが攻撃的であるとはいえ、実質上として要塞的であり、メメ日、我々が決起し、現実にケバ等をふるい、政府中枢に、或は攻撃目標に一歩踏み入れずに攻撃をあきめていた。いわば権力は行政的であり、暴力はその行政の一環の中にかくされていたから着実に力量を育て上げられ、過渡的形態である「中央権力闘争」を制圧し切るまで待められていたのであり、これ及前提の条件であったのだ。

四、二八闘争は、そうした過渡的形態への決別を権力の側から宣言された闘いであり、この時、警察内の党派闘争から党派闘争に至った未曾有の闘争の主要な要こそ、まさしくそこにあった。

すなわち、権力は絶対的に武、治安攻撃を展開する。逆にいえば権力の暴露と我々自覚闘争決定せざるを得ない状況に到達したといえる。

従って、我々及、今日の闘争形態を「中央権力闘争」として固定、その主要な戦術を政府中枢占拠として規定する誤り、それは世論的に暴露へ武装蜂起も含まれ権力奪取として幻想的に自己満足されなければならないという状況が生れたのである。

だから、我々は既に、重層的形態としての「中央権力闘争」の段階から、蜂起、権力奪取に至る階級戦争の時代に入ったことを承認し、暴露の解体に向けて、戦術戦と遊撃戦を主体とした内戦の第一段階として承認した。

しかし、本当に我々はそう承認したのだろうか。我々は「内戦の開始」を「中央権力闘争」、マンセニストとして固定し、「西田制圧→政府中枢へ進撃」と戦術的に規定した。確かに「中央権力闘争」は従来の過渡的段階に照応するものであるならば、西田制圧から政府中枢の進撃は必然的な型であり、事実可能であった。

だが、権力の前面化、実制圧ということは、の如く、我々権力によって制圧され、政府が直接によって内ゲバによって守られるということであり、二重の意味で我々に重層的困難さを強いているのであり、それ故にこそ我々の闘争の主要な敵を権力の暴露との戦争とせざるを得ないのであり、合法主義からはっきりと自らを区別しなければならなかった。

だが、現実は、当日〇〇ターミナルでXXとCCが武器を結合させる。或は又公然と場所を手当し、大衆を集め、一斉蜂起やっちゃみせるといった形で闘争を行なう。もしくはそうせざる得なくなるといった形でズブズブの合法主義に陥入ったのである。

そうした結果は、権力の現段階とそれに照応する内戦の型を確定されずにいた故に「闘争及闘争」として組織されればかった結果的表現なのだ。

八月の階級闘争の型とは何か？ ―内戦の型とは何か？―

それでは確定されるべき内戦の型とは一体何なのであろうか。

我々は、それをソヴェト運動として規定してきた。ソヴェト運動の時代の到来を予告した東大闘争に始る学生主義大学の解体、安保粉砕の砦を目指した学生闘争の前であった。

しかし、こうした人民の武装と制圧、解放区の形成を主動とした闘いが全社会的領域にまで拡大せんとした時、権力は実制圧し革命の波及を許さず、学生運動は「西田戦争」、「暴力的に断絶」、「暴力的に断絶」、「暴力的に断絶

だが我々は、これらの問題を検討する前に次のことを確認しなければならぬ。

(一) 基本的内戦とは、諸階級が敵対する二大陣営を口実にクリアートとブルジョアジーのヘゲモニーの下に武装せる(準武装)勢力として登場することを絶対的条件とする。

(二) 今日、権力は、小ブル諸階級に対しては、ブルジョア的、小ブル的利害の代行者として、それへの幻惑者に正義の軍隊=戦闘隊を送り込み、それとの闘争において自民族等の武装軍団を作り出している。

(三) 階級闘争の鋭さと深さは、小ブルジョアジーの武装を促進し、右翼の組織化と武装化を推進している。地方ロシクリアートのヘゲモニーの主導権、平連の自然発生的暴力闘争への領域への突入及び方向通り武装への道を進んでいる。

(四) だが、勿論、この武装化は未だ徹底化していず、萌芽的である。だからこそ我々はこれらを「内戦の萌芽」即ち内戦の最初の段階と呼んでいる。従って、我々の目標は、この最初の段階を本格的内戦へ、第二段階へ押し上げ、めるものでなくてはならない。即ち萌芽的、部分的、一時的にしか存在し得ない諸階級の武装化を徹底的に推し進めなければならない。

(五) 以上のことは我々と権力との闘いの深化を通して行われなければならない。

いいかえれば、軍隊明らかにしたように、首都を短期間なら制圧できるが決してそれ以上ではない権力に、長期間それを維持し、それに軍事的な打撃を与え、政府を作りだし、戦闘隊から自衛隊の登場を引出し、いわば「軍政」的状況に追いこむことである。我々にとって、権力の今日のこうした力量へ一日は貴重なる時間であるが、それ以上をない。こそ、我々の内戦の型を戦闘と規定し、又、それを可能にしていると言える。

即ち、ちらちと雪を降り、敵を一発脅迫で打ち破るに、武装日等で、敵日等いみ、素朝戦と遊撃戦で敵を麻痺させ、部分的に打ち砕き、敵を針付けにするには我々は充分であり、敵は等に不安を残り、不充分である。

だから、貴の正規軍の主力は明らかとなった。我々は総力を挙げて、一一月を「首都奪取」と戦闘粉砕」を掲げた、武装行動の日々としなければならない。

「内戦を展開する党とは」
「軍事を戦術する組織する党」

では、そうした党の型とは一体いかなる型なのか。我々は赤軍派との理論闘争の中で抜らの「BUNDは

軍事を機能としてしか扱っていない」という批判に理論的に応えてきた。

だが、一〇・二一で示されたことは党にとって軍事は、現実には、実体的に機能としてしかなかったということである。すなわち、党が中央より集権的に軍事を組織するということ、地区党の軍事化を企ることが出来なかった。

例えば、地区党、共青と若干のシンパを含めて作られた軍団は党全体の軍事で、いみなる強力を行うべき基礎的に指導されず、いわゆる戦闘を行うべき全党的に問題なるべき、地区党を党中央に軍事的に組織されず、地区党にとって軍事は地区党の全てではないと考えられていた。

従って、軍事が生みだす水平主義へ、これは軍事には一定程度必要なものであるが、に対し批判は行いうるが、決してその要求の負に応えることは出来ず、その結果、果敢な戦士を党末端から組織することができなかった。

また、二八闘争で明らかにされた権力の段階に対する認識と、従来のきへの諸隊へ正面戦を基本とした「突撃戦」とのせやうるは、現代階級闘争の力にパニックであるなくへ正面戦は解放区、根拠地を選ばなければならない。一種のカンパニアという性格を免れえないこの内戦へ、軍事を軸とした階級闘争と考えると以上、戦争に[illegible]

的ではなくむしろ政治的と前進の確信をもたらえなかった。

だが、軍隊は明々白々となっている。全ての新左翼を通し、今日の〇一〇・二一以行という意味で一階級闘争を貫徹し切るだけの力量をもち得ないことが証明された。

いいかえれば、この一一月闘争を内戦の開始として実現しうる党、全ての力量を軍事として表現し、権力に対し政治的に対抗しうる党にそれ以前の階級闘争を組織しうるということである。

だから、今日の党は、党四期以軍事的指導を、現場、可令部の前面を直接的に行い、把握しきり、そして地区党は全てを一一月の内戦へ階級戦争を行う革命の軍隊の少隊として位置づけなければならない。

我々は、はっきりと一一月以後の階級闘争を貫徹し、党体制を整備し、強化するべきという見方をすべきである。

我々が内戦を開始しようとすれば、階級闘争の新たな段階を党がもはや開始され、革命党は大衆の手によってソ生され、我が党自身の部分ではなく内戦の中で自ら上昇する中堅幹部によって支えられると確信しなければならない。

さて、一一の十数日を党四期と地区党を軍事結合す

ることを完全に果し、○○月××日、△△箇所に合法的共闘を用い、それから軍事をそれから行うというスローガンの合法主義、軍事の自然成長性への掃滅から明確に識別し、平時から軍隊自治及軍事を組織していくべきである。そして大衆のいない場所での戦斗でも、それ及敵は乃の装備の弱い所なら、戦闘的に位ちづけ、徹底的に撃破すべきである。何故なら、こうして内戦及開始され、拡充されるなら、諸階級は右も左も、段々迅速に反応し自ら必要な行動を直ちにとるからであり、現在、大衆及集まっているのみいないのみに拘らず、結局同じだからである。

内戦の段階に於ける合法と非合法の関係

だが、我々は大衆との結合をはからなくてもよいと考えてはならない。ただ従来の型とは異っただけである。大衆的昂揚は一〇、一〇に示された如く、ますますなく、逆原決戦へ向けて深く、広く進展上っており、大衆的平和的カンパニア斗争は、場所、日時が予告され、決定されざるすれば、巨大な大衆を結集し、展開される条件を示している。

だから、こうした合法的斗争は党の指導によって、指導され、組織されなければならない。この二と体式的には正しい。過及問題は、こうした指導、援導、結合の形態は、内戦という階級斗争の段階では力ーマイケルがキング氏暗殺の際の暴徒の如く、そして全ての労働人民に対する立場と同様に、大衆、プロレタリアートの斗争に弾圧を行う権力に対し、復しゅうを行うといった形で結合しなければならない。

かかる結合は、大衆の斗争への弾圧者に対する「正義の軍隊」としての党の正規軍への信頼感として立ち表われ、大衆の斗争は人民の海として、正規軍を隠し、容易に武装行動を行うよう好条件を作りだす。

だから、そこでは党の正規軍を中軸とする軍事行動は、個々の行動に於る大衆の結集、参加によって、大衆との関係を保つのではなく、今日の内戦の段階を代動員と規定する以上、その戦斗の特殊性によってしか保ちえない。

そして、そのことによって、大衆的、平和的カンパニア斗争に結集している大衆を、戦斗場へひきつけ、大衆に暗黙のうちに行動をもって、大衆の武装の方法と、大衆自身の攻撃目標を示し、決起を促していかなければならない。

そのような段階になれば、我々は、内戦の第二段階＝陣地戦に移行しうるのであり、我々のソヴェト運動はその内実をもち、計画された〇〇センストは党の正規軍に守られ、直、大衆及結合し、全社会構造をゆり

動かして進行し、勝利的に展開されるであろう。

十一月斗争の我々の任務

最後に、我々は一一月斗争をいかにヨウのかという二と語る前に、次の二とを明確にしなければならない。

一一月斗争は決して政治的に失敗したり、敗北したりすることは許されない。一〇、二一は、その政治的敗北及一一月に再び斗いの開始を告げ、失敗を回復できるという意味に於て許された。

だが、今度こそは、一〇、八以来の全ての誤いを総決算を行い、内戦に突入できるのみ、否及を問われているのであり、我々の失敗や敗北は単に一党派の死を意味するだけでなく、新左翼の全ての死を告げ、大衆の革命的前衛の退却と反動の完全制覇の時代の到来を到来つげるものである。

以上の確認の上に、一一月斗争を語るなら、それは、党全体の義務ならば、必ずに至るまで、度実の兵士として内戦を切り開き抜けねばならない。

既に、いくつかの党派は一三日及びの長期的戦闘の開始を告げている。我々もまた、同様に、一一月斗争をそのような内戦として切り開かなければならない。だが我々の主力部隊の戦列は、西時に告げられ必要はない。だが、我々はあくまで全ゆるクーデターナルどんな小さな攻撃

のターミナルといえども）ありと全ゆる警察署、交番といえども機動隊一個大隊以上永久に配ちしない限り、我々の戦動員のそじぎにならざるを得ないことを告げておきさえすればよい。

そして、それと並行的に確定された日時に、大衆的、平和的カンパニア斗争を拡張闘争阻止に向けた大斗争を組織し、これらの大衆を背景に、極く限られた戦斗隊員で、典型的な正面戦、占拠戦を展開しなければならない。

そして、これらの戦闘の中に於て党は、一一月斗争以来、前者を主要な斗争形態として、平時から軍事を組織した党の正規軍に直接指ドされる軍団によって、計画的に実行されなければならない。後者は及のテロ攻撃に対し、ベトコンの大統領官邸を占拠した斗争のように、極めて戦略的な天モニストレーションとして、しかも全ての極めて決死的な斗いとして、前者に対する補助的な役割として位ちづけられ実行しなければならない。

戦斗は、一一月斗争は首都のみである。党にとって、唯一の主力は、首都に於て永新的内戦を開始できる及吾及るのみ。それ以外の都市に於る大衆的斗争は、それ自身は党にとって弱んど無イミであるといっても過言ではない。

全ての党員同志を全て、一一日上旬より首都に結集させ、重国として組織し　党中央に軍事的に直属させなければならない。

こうした党体制を確立し、内戦に突入するためには、我々は徹底的に党を純化しなければならない。

何故ならこのような内戦に対する不安、恐怖、動揺そのものに対する不信感ある限り、重国は回復化を勝ちとれず、戦闘内に分裂、あるいは指令の不徹底性が生れ、武器の使用も出来ず、敵力に攻撃され、敗北に追い込まれるからである。

更に、我々が述べたように、敗北は決して許されない。以上、全党員一人一人及党中央よりの軍事的指令に忠実切り、無条件的に服従しなければならないし、それはまさしく内戦の負で武装されるべき要件があるのだ。

党を徹底的に純化せよ!!　内戦を開始せよ!!世界革命戦争の勝利に向けて前進せよ!!

こうした闘いを展開するのは一〇〇〇〇名の確信のない党員より、一〇〇の戦士の方がよりよい。

全同志諸君!!

一一日上旬　首都に結集し、重国として行動せよ!!

首都を承認的内戦状況に陥し入れ、武装蜂起・権力を奪え

ぬ影におびえさせ、徹底的にセニメッセよ!!

死は恐れ得ない事実であり、我々には革命戦争にみあう栄光ある戦士としての死が偶々繋うにちがいない。

この戦闘の中で、我々党の現在の同盟員ならいめつ的打撃を受けるだろう!!

だが、共産主義者同盟として、世界革命戦争の不滅のものを残らしめよ!!

我々が一一月を内戦として、党の全てを賭けよ!!そして、その二とによって我々が政治的に、そして部分的には軍事的に勝利するならば、その時、新たな地平が、権力は武装蜂起から自衛隊を登場させ、自らの危機の深さを物語り、誕生間の武装は深部まで突き進み、内戦は武装蜂起から、服従戦→解放へと突き進み、新たな革命的最一戦線は夏の世界党にケン引され、世界革命戦争の烽火の如き波及全世界をおおうのだ。

全同志諸君!!

今、一歩、突きすすめ!!

＜了＞

。大衆的「中央権力闘争」から内戦開始へ

。10、21闘争、革命戦争―内戦の開始というべきこの闘いは、一月㊐による蜂起、神田、新宿の武装制圧によって圧倒されたかに見える。一九六八仏五月、ドイツ、アメリカ、チェコを襲った労働者闘争、三月ロック闘争闘争の歴史的結合、武装闘争の開始は帝国主義ブルジョアジーズムとプロレタリアートの衝撃、恐怖に陥れ、米国人デモ者合衆化されつつある中で、ベトナム革命戦争NLF10、ベトナム」の労働者及市民闘争の転換を引つてきたわかわが、二の国際的闘争の内部を貫通する打撃へ権力闘争への転換をもってうち破るべき任務が二の10、21―11月佐藤訪米粉砕の中に二つの闘いである。一月㊐の作った「マル戦以下の闘争」の中で本隊の中国への復帰と「暴力追放」、民青自治会粉砕し　日共帝国主義のアジア侵略―ベトナムへの直撃攻撃粉砕―改憲―日共

社会体制、㊐の中民社会主義、民青社会主義の結合

こ者を生んで進行している。

ガリラ戦の激化―常態化、日本の闘争形態によって革命をはかろうとする中核派、赤軍派の弾圧による前段階崩壊絶対のゲリラ人の転落、Bの神田―表関制圧の経験の中で　権力もマスコミも全共闘大衆、大衆一般を恐怖をもってそのものの革命的行動は10、21以降の闘争及び「大衆路線」に復帰するのか　内戦の一方火炎瓶を出力闘争」へと進むのかの岐路を見つめている。

われわれは10、21の中から㊐の首都制圧への強さの中に初めて「革命的」宣言「敵権力の内戦対策の弱さ」二の首都制圧を一挙に成功させることの意味する重要と重要的を踏まえ「党員の自覚」に革命に抑圧されている同志諸人民のうっせきの爆発的契機を見ておかねばならない。

そしてこの上に立っていわゆる「中央権力闘争」ロシア、ソ連エトロ「開始」抑圧の下発に開始した内戦の中で

河口―新潟闘争の初めの一つ、新潟の最前線に

江的なかつにことの絶望を技術的なものとしてのみならず「10、8以来の半合法的大衆的武装闘争の形態と力量上の極度限界の克服」「革命―武装蜂起―ソヴエトー」に収斂するこの闘争をかちとらんとしていることの矛盾のみに見い出し、自の内戦、合法―非合法闘争の方法、軍隊と武装闘争の分離による官僚的合法的指導に関―闘争形態の創出へと武装蜂起―日米戦へと突き進まねばならない。

(二)

われわれはオ一に昨年、28―10、21以降引いとっ、さらに半合法的中央政力闘争が、㊥の政策―新宿制圧、神田制圧により昨10・21と更の(当時は㊥は内戦ゴッコ)の政府中枢の奪取にでかけていた)政府中枢―大臣、官民社会―の前面に、そして組織基地、市民社会内にまで登場することによって形態変化したこと　即ち㊥との全面戦争がその前段階に於てのちどられねばならないことに直面した。そこでかかる変化した力の反撃は制を全面的に解体になくては政府中枢制圧できないとするならば、それは日比谷―武装蜂起にこれ迄の日米戦の中央政力闘争―部分的地域武装蜂起―中央政力闘争―武装蜂起―全地域的武装蜂起―全人民的武装蜂起―ソヴエトM―中央政力闘争―MSTの全人民的決戦を想定した。だがこの過程、神田を基盤とこれまでの闘争の最後―海軍政力闘争に於て蓄つ手まや、中央政力闘争政中枢にせまりMSTが全人民に拡がる前に、逆に㊥の攻撃―山手線―中央線、神田、新宿制圧とこと先制的に攻撃した。だから右に述べた中央政力闘争―武装蜂起―MSTの、軍隊と大衆の直接結合を通じ全人民的武力、政力奪取に収斂するものとなるまでには、即ちかつソヴエトMに到るまでには絶対的反革命的大衆的武装闘争を通じて到達した。それと別に軍隊内部の一時代を切開き、全人民の軍隊的闘争を武装、政治的制圧軍隊による㊥のせんめつ、根拠地の制圧へと発展させ、オ二武装の居住の拡張―全共闘的家の孔越　居住―を創り出し、かつる内戦の一時期の中から㊥全面解体可能な全人民的軍隊と、武装解放区(地域MST)―新ちソヴエトMの地点に初めて到達することができる。われわれは10・21―11月の獲得目標を日米の闘争―大衆的武装闘争(日時、場所を特定し、政府中枢への大衆に呼びかける)、日米の全共闘根拠地(神田MST/解放区、あるいは新宿神田)から、真のソヴエトM(中枢/MST)実現に到るまでの過渡期の内戦へも深化の過程(の獲得)の要創出を獲得目標としなくてはならない。

都市プロレタリアの武装蜂起による市民戦争で合の武装闘争の主体となる農民軍、市民防衛隊正規軍が準備されたとして、全人民の武装解放区(地域MST)と武装蜂起可能な全人民の組織基盤の構築にもけた(地域MST)内戦の一時期へそれは戦略的には政府中枢制圧―全地域武装解放を目指すことを射程にもその者が全国ヒ(㊥の一角を粉砕し、地域的に制圧してゆく)闘争―ゲリラ的持久戦である。まに戦術創造と発展とする㊥の一角のせんめつの正確成でか

る地域に西田や高田馬場で部分的に実現しようとした）の型を創出することを一日の最小限の綱領目標としてゆかねばならない。

（二）

㊥による民衆的蜂起―市街戦―新宿制圧による「内戦」の本格的開始にもかかわらず中枢制圧―MSTが意味する「武装蜂起」―㊥全面解体への恐怖と現実の武装力、階級的結集つまりのギャップが10・21―11月の政治的軍事的目標を目標とすることを通じて、総蜂起体制を困難とした。又、本格的中枢―MSTが㊥との内戦の一時期を通さねばならず、大衆から一時分断（RG、反戦武装行動隊）こと軍事の必要性が従来の中枢―MST―ソヴェトMの革命の型（構成）の媒介的提起によってはその大衆M主体的戦いによってより鮮明にされ得ないという問題が地区に於てつき当った次の問題であった。

従って世界決戦―10、11月斗争が白表主体的、大衆M主体的戦旨を貫徹しながら、70年代内戦の時代の要求口であることの意志統一、その形態の、論を要求されってかねばならない。

こうまでも長く世界大衆の意識は安保プロレタリア決起にむけた安保革命戦争―内戦、即ち帝国主義軍隊の解体、帝国主義戦争、搾取の結果や、人民の不満、大衆ではなく内部によって対決とってゆくこと、そのために大衆の種々の内結形態（生活斗、学習、自行武装）の発展にではなく、世界革命戦争で武装された前衛党に組織された軍事学を不可避とするということであった。一部同君との論争となった安保一日同時革命は安保同時革命は、ファシズム、安こずしファシズム論、西欧型安保論の「世界的転制」も主要なものではなく、むしろ内的はずれであり、それ自体としては直面する階級斗争だけの武装である。なぜならば、安保党―安保未軍―安保革命戦争―前衛階級戦、ファシズムはプロレタリア独裁かなる安保革命戦争は七回大会（10・21へ昨）で明確体としては確認されていたことだけからあり、且つ又TMR体制―反革命同盟を導入した危機の累積、同盟反革命戦争、なしくずしファシズムを前提した上で前段階未成の持つ

首都内戦―100地域制圧―㊥勢力を「中央権力斗争」を成害目標としつつ成術的に対いとられねばならない。

明らかに半合法的「中央権力斗争」の極限化の生産は、実力の立つ蜂起、ドヌレのそれと軍事的、政治的には同レベルの段階のはじまりであり、学生、都市プロレタリア、山民蜂起、左派の上海蜂起を直接とする世界革命の終りが本格的内戦、蜂起の初りであったのと（后進国―帝国主義国の差異はあれ）同レベルの問題に直面していると云わねばならない。

確定した武装蜂起、攻撃目標、単発的直接的蜂起でなく、戦略―ルギー中央総制圧の㊥の弱い環をせめつこしてゆく目標を立てねばならぬ。そのかわりたてた目標はなしても貫徹するのでなくてはならない。

日共の中枢自行隊はわれわれと同じような位置ぶけをこしながら（根拠地主義を批判している）山村解放なる規定と中枢制圧なる武装目標なきまま、従って単なるドリフとして戦斗段階でのドリフ、しかし蜂起した正面戦をその差軸

どするものであることを志却した。従って破壊活動、大衆騒乱の状況、テロの軍事組織では有っても、真の意味での戦斗組織ではなかった。（赤軍派の前段階はドリフに転換した時点も同じである）。われわれは中期的にはもち来の蜂起に対する新たな部隊のせんめつ戦を基軸に、破壊活動への強調、新左翼破壊戦、地域制圧、全地域的蜂起、安保蜂起、或はその副軸としべ安保蜂起、或はその時点では地域大衆が行いなくてはならない）、㊥を山岳―中央総内閣とぎすけにし、内側は蜂起、前進する㊥が制圧し、外側を革命の側に獲得しつつ、㊥が外側に来る時は同盟、孤立、新産する革命の高揚きい、同時に戦斗を全部域同時に推進する力量とこれを統一、総結合、反撃戦一戦線を指導してゆかねばならない。

それは例論○地域での固定した蜂起、蜂起のトツギンをといった日本の斗いではない。

このことを通してわれわれは初めて神田MS十七基軸として戦斗段階でのドリフ、しかし蜂起した正面戦をその差軸

こしたる武装的中央権力斗争段階に入り、㊥の系統的

圧の段階で直面した民族―国際主義単に軍事的―軍事技術的なものとしてとらえることなく政治的なものとし、中枢ヨギー解放を地域MSTを政治目標とした内政のオ一歩へと突入することができる。

佐藤訪米に憑つまる日帝のアジア侵略―アジアニズム体制の進行―戒厳体制、これを全面的に打破することができず、政府や権制圧の不可能性の中に大衆MやMSTへの転落は今日ますます増加するであろう。われわれはこれに対し、内力の政策には徹底的な前衛としてこうちむかえ、文明開化制の持つ異質な長所　見習いこその一角を軍事的にせんめつし〇〇を制圧することが、内力・国の政府、人民の不満の爆発的実践を拡大してゆくものであることが、戒厳―内革命が強大となればなるほど、これを内政として系統的に打破ってゆく中で、大規模な人民の決起を生み出してゆくという不可避性を確信するものである。

北大、北大阪制圧大会的（武装）ヨギ地区解体内政より一歩進んだヨギの員も直ちに同一の問題へとぶつかるであろう。

このことは七〇代へむけた闘体制の確立と不可分である。かかる内政と大衆的平和デモ、(1)地区軍団編成とMSTオ備へ（地方内ヨギ）(2) 地区民政、地区軍団、地区員の実践、党組織―地区組織と軍事委―ケー軍団の員員化をまず主体上での再分裂である。

オ一に党組織の軍事化による地区党の軍事化がはかられねばならない。（将来的には青―SSLの一体化）この二つを通して中央機関―中央ロケによる地区からのロケの直接並ぶ体制（この二つがないと全地区・全軍団の一体化はできない。）　三、敵地帝国者のオ一の任務の軍事形成者としての自覚（二ヨギでのMSTは二の点をあいまいにしてきた。四、地区民政の軍団予備にたると同様に、オ二政組としての根拠地形成（将来の地区ソビエトの萌芽）としての位置づけ　五、ボー大衆闘争とヨギ大衆の、わかる内政の時代に於ける、地区の根拠地（無政の武装政治闘争のいんとくれ）（政治的解放区に到る前段階での学習

生産点での拠点でなく産業を軸としたそれ）としての任務の確定等。

とくに日本の半植民的大衆的中央政力ヨギから非合法―内政への転換が一時的に大衆との接点をそこなう要素ができないことからわかる党の長期へ大衆MSTを政治的斗争を生みだすとせよ、われわれはこれをほとんど体に行はもちろん地区―学団の組織工作に集団の中、政力ヨギの勝利的前進による大衆よりの分裂―再結合をかちとってゆくことのオ一歩としての八月大会をヨギとの政治闘争にしたい。